

郷人会の行方

前関東八千浦会 会長 笠原宇美男

省みまずと平成十三年五月二十日の総会で、第四代の関東八千浦会の会長に就任してからは、七年の歳月が流れました。二期四年を過ぎた頃から、会長に相

応しい後輩に席を譲るべく、何度も役員会にはかったのですが、その度に慰留されて今日に至りましたが、去る六月二十九日の総会で退任を認めさせて頂きました。

この七年間、関東八千浦会の発展と会員の方々の一層の親睦に、ひたすら努めて参りましたが、力不足のため皆様方の期待に充分添えたとは申せません。しかしながら会員や役員、それに関係各位の格別なご協力を戴き、ふるさと八千浦沿岸の自然再生、八千浦小学校の児童達への故郷の歴史や伝統と自然環境の大切さの啓蒙、八千浦会の歌の作成、そして会

員相互の親睦の向上に、いささか役立つことができたのではないかと、自負しております。

そうした活動を通じながらも、絶えず私の念頭をかすめたのは、郷人会の今日的意義についてでありました。

郷人会は、「こうじんかい」でも「きょうじんかい」でも、広辞苑をはじめどんな国語辞書にも記載されていません。これは不思議なことです。しかし今回は、それを詮索するのは措いて、現在の時点で郷人会が抱えている問題を述べさせていただきます。

先づ、会員の高齢化と会員の減少化があります。集団就職の時代が過ぎてから年を追って、故郷から関東地区への就職が激減して、会員の基盤である壮年層が

極めて少なくなったため、会員の年齢構成が極端な逆三角形をなしていることです。

二番目の問題は、故郷との時間距離の短縮による故郷感の希薄化であります。鳴くべ鳴かずの確氷峠のトンネルを抜けて辿りついた故郷も、今では新幹線ではくほく線に乗り継いで、二時間餘りで直江津駅に降り立つことを思うと、故郷はもはや『遠く』にありて思うものなりではなくなってしまうのです。

三番目は急速な故郷の自然環境の変化についてゆけない疎外感というか、よそよそしさであります。啄木の歌にこんなものがあります。

ふるさとに入りて 先づ心傷むかな
道広くなり 橋もあたらし

啄木は「林中の譚」の中で次のようにも述べています。「人間が自然に反逆し、常に森林を倒し山を削り河川を埋めて：然れどもその道は天に達する道にあらずして地獄の門に至る道なるを知らざるか：」。八千浦地区の黒井から荒浜にかけての海浜の、日本海水化工廠の排出した石灰の公害の山は、もはや、八千浦を故里と呼ぶに値しないものになっています。



荒廃した八千浦の黒井。荒浜の海浜

人間は年をとると新しいことから忘れてゆくなどと言われていますが、六十代の故郷を離れて暮す人々にとって、ふるさととは、美しい砂浜であり青い海であり、はまなすやはまえんどうの咲き乱れる母なる土地なのであります。

年を経て いよよ恋しき ふるさとの浜ひるがおの やすらう花よ
知る人も まれになりたる
はまぼうふう 偲ふ故里 砂に咲く花

・宇海・

四番目は、郷人会という集いの存在の意味や意義に疑問をいだく人も少なくないということ。故郷を同じくする人々が集い合つて新年会、懇親会、遊行や会報の発行などに参加することで、何の得になるのか、参加する費用も軽視できないなどという声もあります。

さて、最後の五番目は、親兄弟や親類の死亡による故里との近親感の密度の希薄化になります。小学校の同級会なども達者で集まれる人数も年々減つてきて、開かれるのもめづらしくなつてきたことによる故里との、へだたりはますます広がつてゆきます。

以上のように考察して参りますと、郷人会の行方は極めて悲観的であります。

しかし私はこう考えるのです。私たち人間には帰巢本能というものがあつて、生れ育つた故郷を母胎として育つた人間の故郷への憧憬や郷愁は人間の遺伝子のなせる本能のしわざなのだと思います。島崎藤村は故郷の馬籠宿を訪れたとき話した言葉があります。

血のつながる ふるさと
心のつながる ふるさと
言葉のつながるふるさと

また、相田みつをは「父と母と二人、父と母の両親で四人、そのまた両親で八人、こうしてかぞえてゆくと、十代前で千二十四人、二十代前では……？ なんと百万人を越す人です——」。私たちは太古の縄文の時代から……過去無量のいのちのバトンを受けついで今生きているのです。大袈裟に言えば、郷人会という集いは、理屈では表現できない人間の本能や業（ごう）の所産ではないかと思われるのです。

生れ故郷を一つにする人たちが集つて、何の屈託もなく、上下の関係もなく愉快に話し合える場、かけがえない出会いを通して、生きる喜びを知る、それが郷人会であつて良いのではないかと思うのです。「人生のよろこばしこころ」の場であるべきだと思うのです。

